楠木正成・正行・正儀
南北朝三代の戦い

生駒孝臣

近年の南北朝・室町時代研究の成果をもとに、気鋭の研究者が時代の評価に左右されない

新たな楠木氏父子像を描き出す。

実像を再構築

悪党でも、忠臣でもない。

最新研究

楠木正成・正行・正儀　南北朝三代の戦い

生駒孝臣

星海社

292

SEIKAISHA
SHINSHO

はしがき

二十一世紀の楠木氏

楠木正成・正行・正儀と現代

鎌倉時代末期から南北朝時代の武将楠木正成とその長男の正行、三男の正儀。この三人の父子が本書の主役である。

いま、本書を開いてくれている多くの人は、この三人、あるいはそのうちの誰かに興味があって手に取ってくださったと思われる。しかし一般的には彼らが歴史上、どのような活躍をしたかを知る人はさほど多くないのではないだろうか。

正成については、ほぼ全ての日本史の教科書で名前が出ているため、かつて習ったことを覚えている人がいるとしても、教科書でほとんど取り上げられることのない正行、教科書には一切登場しない正儀にいたっては初めて名前を聞く人、そもそも「まさのり」と読むことさえ知らなかった、という人がほとんどであろう。

それでも、最近、マンガや小説、舞台などで楠木父子・兄弟が取り上げられる機会が増えたことで、以前に比べればはるかに彼らの認知度が高まっている。しかし、それらのコンテ

ンツで描かれる彼らの姿は、脚色や虚構を伴うものであり、史実でのそれとはときに著しく離れたものであることは否めない。もちろん、娯楽として楽しむものだから、無味乾燥な史実を最優先にする必要はないことは理解している。

だが、この父子はそれぞれが没後すぐから、多様な捉え方をされて、時代とともに評価も変わり続けており、それが現在にも続いている。

楠木父子の捉え方

正成・正行は、鎌倉幕府を倒した後醍醐天皇と天皇が樹立した南朝を裏切ることなく、その生涯を終えた「忠臣」として賞賛され、戦前の教育では日本人の理想とするべき人物とされていた。だが、そうした見方は戦後になって否定され、正成は「忠臣」から権力に抗う「悪党」（単なる悪者ではなく、荘園領主や幕府・朝廷に対して反抗的な活動をした武士など）という評価で捉えられるようになった。

一方、正儀に関しては戦前の教育で一切触れられることがなかった。なぜなら、彼は南朝から北朝・室町幕府側に転じて、再び南朝に戻るという変節を遂げたため、江戸時代から「忠臣」の父・兄とは異なる存在とみなされていたからである。

では、彼らの評価が時代によって大きく変わる理由はどこにあるのだろうか。それは、彼

らの活動を物語る史料の残り方に顕著な差が存在するからである。

歴史学、特に日本史学は、文字史料に記載された事柄を読み解き、それらを根拠にして、歴史的事件や人物の実像を復元する。文字で書かれた史料ならばなんでもよいかというとそうではない。まず重視するのは、ある出来事・人物と同時代に書かれた古文書や古記録である。それらを一次史料（一級や一番という意味ではない）というが、本書では同時代史料と呼称する。

ところが、同時代史料は古い時代になればなるほど、残っている数が少ないという問題がある。また、滅んでしまった家に伝わっていたであろう史料も、その家の滅亡と同時に消滅することもある。楠木一族と彼らのもとに残されていた（かもしれない）同時代史料がまさにそれにあたる。正成・正行の評価が大きく変わったのは、彼らの人物像を物語る同時代史料が極端に少ないからである。

楠木父子と『太平記』

それでも、現在まで様々なかたちで彼らが描かれてきたのは、彼らの生存時あるいは死からほどなくして作られた全四十巻の軍記物語『太平記』の存在が大きい。同書は諸説あるものの、暦応元・延元三年（一三三八）から観応元・正平五年（一三五〇）までの間に最初の形

が、応安末から永和年間（一三七五～七九）に、それ以前からの改訂作業や数度に及ぶ書き継ぎ・添削等を経て成立し、明徳三年（一三九二）以降に現存する四十巻本の最終形態が完成したとされる。

同書には、楠木父子の活躍が多くちりばめられており、同時代史料の少ない正成・正行の実像を追究する上で欠かせない。また、彼らに比して比較的多くの同時代史料が残る正儀についても多くの紙数が割かれており、同時代史料ではうかがえない、彼の側面を読み取ることができる。

と述べると、『太平記』は、同時代史料ではない後世の編纂物（二次史料と呼ぶ）だから信用できないのではないかと疑問に思う人もいるだろう。確かに『太平記』は同時代史料ではなく、物語という虚構や脚色が含まれるという性格のものである以上、記載内容の全てが真実だったとは限らない。それでも、彼らとほぼ同時代を生きた人の手によって書かれたものであるため、一定程度の史実や信憑性のある情報をふまえたものとみることは許されよう。ちなみに、かつて『太平記』は南朝寄りの書物と考えられていたこともあったが、現在では否定されており、室町幕府の成立・南北朝動乱に関わる正史として成立したと理解されている。したがって正成・正行・正儀の人物像を復元するために『太平記』を用いることは、南朝方に偏った見方に陥るわけではないのである。

本書の視角

本書は、楠木正成・正行・正儀三代の軌跡・実像を、同時代史料や『太平記』に基づいて、可能な限り史実に近いかたちで復元することを目的とする。もちろん、筆者の力量で、しかも現代人が彼らの生涯を復元しようとすることなどおこがましい限りだが、この機会に現在の日本史学の成果を反映させながら、通説として語られてきた三人の実像を再構築することを試みたい。

本書は第一部と第二部に分かれており、第一部では正成・正行・正儀三代の生涯について、第二部では彼らの支配領域や、彼らとともに戦った武士団、彼らの戦争の実態、三代の後の楠木氏について叙述する。第一部と第二部には、取り上げるトピックの都合上、重複する部分もある。どちらを先に読んでもわかりやすいようにしたつもりもあるため、お許しいただきたい。

なお、本書では、数多くの写本が残る『太平記』の中で、最も早い時期に書写された西源院本を底本とする、岩波文庫の兵藤裕己校注『太平記（一）～（六）』（岩波書店、二〇一四～一六年）を用いる。同書には、各巻（文庫の巻数ではなく『太平記』のもとの巻数）と章段名・アラビア数字の章段番号が記載されている。そのため、同書からの出典については、例えば第三巻の「笠木合戦の事　2」であれば、「『太平記』三－2」のように略記する。

また、史料的根拠や先行研究をふまえた箇所については、（　　）で出典を示し、煩を避けるため最低限の注記にとどめた。

最後に、表紙カバーの画像は、江戸時代成立の『本朝百将伝』に描かれた楠木父子の図である。『太平記』や後世の史料において、楠木氏の名字は「楠」の一文字で記されるが、本書は同時代史料で多く用いられる「楠木」に統一する。

目次

はしがき　二十一世紀の楠木氏　3

第一部　楠木父子　三代の軌跡　15

第一章　楠木正成　17

一、楠木正成の登場　17
二、正成と後醍醐天皇　19
三、正成の挙兵　21
四、正成と建武の新政　28
五、建武政権の崩壊　30

六、湊川の戦い 33

第二章　楠木正行 39

一、正行の人物像 39
二、正行と南朝 40
三、正行の戦い 46
四、四条畷合戦 57

第三章　楠木正儀 65

一、正儀と南朝 65
二、正儀と観応の擾乱 68
三、正儀・南朝の反撃 75
四、室町幕府との激戦 89
五、正儀と北朝・室町幕府

六、正儀の幕府への帰順 120
七、正儀の最期 129

第二部 楠木氏とは何者だったのか？

領地・在地武士・戦争 135

第四章　楠木氏の支配領域 137

一、楠木氏の本拠地 137
二、楠木氏の所領 144
三、南朝国司・守護としての支配地 147

第五章　楠木氏と在地武士　157
一、正成と畿内武士　157
二、楠木武士団の実態　165
三、楠木正儀と楠木武士団の再編　171
第六章　楠木氏の戦争　183
一、正成の戦争　183
二、正行の戦争をめぐる虚実　190
三、正儀の戦争　197
第七章　楠木氏の子孫　205
一、正儀の子どもたち　205

二、室町時代の楠木氏 209
あとがき 218
主要参考文献 221

【天皇家略系図】

- 後嵯峨天皇
  - ［持明院統］後深草天皇
    - 後伏見天皇
      - ［北朝］光厳天皇
        - 崇光天皇
          - 栄仁親王
            - 貞成親王
              - 後花園天皇
        - 後光厳天皇
          - 後円融天皇
            - 後小松天皇
              - 称光天皇
      - 光明天皇
      - 花園天皇
        - 直仁親王
  - ［大覚寺統］亀山天皇
    - 後宇多天皇
      - 後二条天皇
        - 邦良親王
      - ［南朝］後醍醐天皇
        - 護良親王
          - 興良親王
        - 宗良親王
        - 後村上天皇
          - 長慶天皇
            - 後亀山天皇
              - 小倉宮恒敦
                - 小倉宮聖承

第一部

楠木父子

三代の軌跡

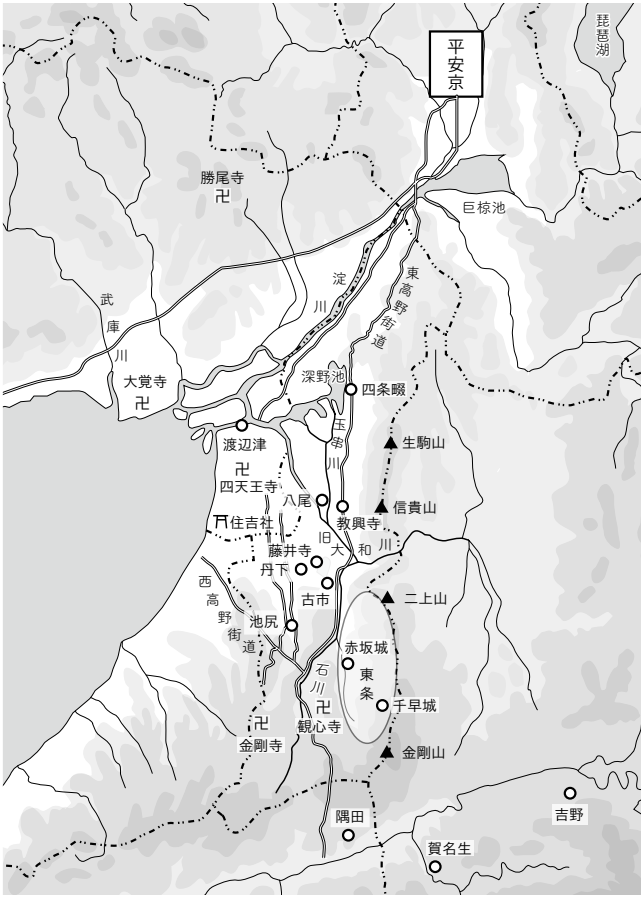


図1　楠木氏関係地図（「東条」はおおよその範囲を示す）

第一章　楠木正成

一、楠木正成の登場

楠木正成の実像

元弘元年（一三三一）の八月から九月にかけて、和泉国ではある事件が起こっていた。「悪党楠木兵衛尉（ひょうえのじょう）」が和泉国の若松荘（大阪府堺市堺区）に乱入し、そこを占拠したというのである（「天龍寺文書」）。この「悪党楠木兵衛尉」こそが、動乱の鎌倉時代末期にその名をとどろかす楠木正成である。

これより後、正成は鎌倉幕府打倒を目指す後醍醐天皇に呼応して河内国の千早・赤坂（大阪府千早赤阪村）で挙兵するが、若松荘への乱入は正成と天皇との連携のもとに行われたという説が古くからある。若松荘は後醍醐天皇にゆかりのある荘園だったことから、同荘が正成の軍費を捻出するための所領として彼に与えられたというのである。

だとすれば、正成と天皇との間には、それ以前から繋がりがあったことになる。ところが、

両者の接点どころか、この乱入事件以前の正成の経歴については一切わからない。彼の出自や身分をめぐっては諸説あり、いまだ確たる答えが出ていない。当時問題となっていた「悪党」（現代的な悪人のことではなく、朝廷や幕府、荘園領主に敵対して追捕の対象となった集団）と捉える見解もその一つである。

そうした中で、正成及び楠木氏が幕府の御家人、あるいは得宗被官（鎌倉幕府執権を務める北条氏嫡流家の従者）であったという説が以前からあるものの、はっきりとしていることは正成について詠まれた、ある歌の内容から鎌倉幕府の関係者だったらしい、ということぐらいである。

正成と鎌倉幕府

その歌とは、千早城の正成が幕府軍を相手に籠城を続けていた元弘三・正慶二年（一三三三）閏二月に、京都で詠まれた「楠の木の根ハかまくらになるものを枝をきりにと何のほるらん」というものである（『後光明照院関白記』）。「楠の木の根」（＝正成のルーツ）が鎌倉にあること、それはすなわち楠木氏が幕府に関係のある一族であり、幕府にとってはいわば「身内」の正成を討てずにいることを揶揄した内容である。つまり、この頃正成が幕府の関係者であるという事実は、京都の人間には広く知られていたことを物語っている。

当時の御家人には、内裏を警護する内裏大番役を務めたり、承久の乱後に設置された六波羅探題に出仕したりするなど、京都での活動（在京活動）を担うものが多かった。とりわけ、畿内に拠点を置く武士は、古くから王家（天皇家）や貴族諸家、朝廷など公家への奉仕を行っていた。よって、河内を拠点とする正成ら楠木一族が御家人であったかどうかは別にしても、在京活動を行っていたとしても不思議ではない。六波羅への出仕か公家への奉仕か、あるいはその両方か、いずれにしても正成が在京活動を行ううちに、後醍醐天皇ら反幕府勢力に連なる人脈と繋がり、倒幕運動に身を投じていったとみてもよいだろう。

ひとまず、正成挙兵以前に話を戻し、彼が歴史の表舞台にあらわれた歴史的背景についてみておこう。

二、正成と後醍醐天皇

後醍醐天皇の登場

文保二年（一三一八）二月、後醍醐天皇が践祚（せんそ）（天皇の位に即くこと）した。当時の王家（天皇家）は、鎌倉中期に後嵯峨天皇の二人の子の後深草天皇と亀山天皇をそれぞれ祖とする持明院統と大覚寺統という二つの皇統に分裂しており、両者は皇位継承をめぐって対立を続

けていた。その解決策として両統が交代で皇位を継承する両統迭立という方式がとられており、承久の乱以後、皇位継承問題に関与していた鎌倉幕府もそれを推進していた。

大覚寺統の生まれの後醍醐天皇は、そうした両統迭立の原則の中で、そもそも皇位継承候補者ではなかった。兄の後二条天皇の早世により、その子の邦良親王が成人するまでの一代限りの天皇、すなわち「中継ぎ」として天皇に立てられたのである。中継ぎという立場である以上、当然ながら自分の子孫に皇位を継承させ、当時の政治制度として定着していた院政を敷くこともできず、膨大な王家領を子孫に相続させることも叶わない。天皇がそれを打破して自らの皇統を確立するためには、両統迭立の原則を維持して皇位継承に多大な影響力を及ぼし、朝政をも左右する存在となっていた幕府の排除が必要だったわけである。

二度の倒幕計画

天皇は正中元年（一三二四）に幕府打倒の計画を立てたが、幕府の知るところとなり失敗に終わった。最初の計画では天皇がその責任を問われることはなかったが、七年後の元弘元年（一三三一）八月に二度目の倒幕計画が露顕したことで、六波羅探題の追及を受けることとなった。御所を脱出した天皇は、山城国の南端の笠置山（京都府笠置町）へと逃れ山頂の笠置寺を行宮として、関東から進軍する幕府軍に対抗するべく籠城をはじめた。正成が姿を

あらわしたのは、まさにこの頃である。

正成と後醍醐天皇

『太平記』では、天皇が夢の告げにより河内の正成の存在を知り、笠置山へ呼び出したところ、正成が倒幕の方策を天皇に語り、河内へ帰るという場面が描かれる（『同』三－1）。一方、十四世紀に成立した歴史物語の『増鏡（ますかがみ）』によると、笠置山の天皇のもとに続々と集う近隣の武士の中で、天皇が当初から頼りにしていたのが正成であったとする。

正成は自身の館を堅固な城に改修して笠置山が陥落すれば、天皇をそこに迎え入れる用意をしていたという。ここからも後醍醐天皇と正成の間には、天皇の二度目の倒幕計画の露顕以前から接点があったといえよう。

三、正成の挙兵

赤坂城での挙兵

元弘元年九月十一日、正成は赤坂城で兵を挙げた。『太平記』には、正成が五百騎ほどの軍勢でここに立て籠もったことや、正成追討のために派遣された幕府軍が赤坂城を急ごしらえ

の小城とあなどり、正成が繰り出すゲリラ戦や城中からの大石・大木の投下といった、数々の奇策によって散々に打ちのめされる様子が描かれる（『太平記』三－8）。

この間、九月二十八日に笠置山は陥落し、後醍醐天皇は捕らえられ六波羅へと送られた。笠置山を落とした幕府軍は、そのまま千早・赤坂へと向かい、赤坂城一帯を包囲した。正成の籠城はひと月ほど続いたが、やはり赤坂城が急ごしらえの城で兵糧も少なかったことから、十月二十一日に落城した。正成は城を脱出して、その後およそ一年にわたって行方をくらますこととなる。また、後醍醐天皇の皇子の護良親王も父の挙兵に呼応しており一度は正成の館にもいたが、大和の南部に潜伏する。

後醍醐天皇の隠岐配流

京都では十月六日に、幕府が擁立した持明院統の光厳天皇が後醍醐天皇に代わって即位し、後醍醐天皇の隠岐への配流と、天皇に従った公卿や武士たちの処分が決定された。翌元弘二年三月に天皇は隠岐へと流され、元号は元弘から正慶へと改められた。ここに、幕府と争った天皇が敗れて流罪に処され、新たな天皇が立てられるという、一一〇年前に起こった承久の乱後と同じ状況が再現されたわけである。当時の誰もが承久の乱後と同じようにこれで決着がついたと考えただろうが、そうはならなかった。

正成の再挙兵

正慶元年十二月、行方知れずとなっていた正成が紀伊で挙兵し、同時期に護良親王も吉野で兵を挙げた。幕府は直ちに正成と護良親王の追討を諸将に命じたが、正成の進軍は迅速であった。正成は紀伊の隅田荘（和歌山県橋本市・奈良県五條市）で幕府方の隅田党を破ると河内へ入り、すぐさま幕府に接収されていた赤坂城を奪還した。

年が明けても正成の進撃は止まらず、正慶二・元弘三年（一三三三）正月五日の河内の甲斐荘安満見（大阪府河内長野市）での幕府方諸将との合戦を皮切りに、十四日から十六日にかけて、河内守護所一帯や和泉の堺等で幕府方を圧倒した。

この間、正成は河内の金剛寺（同上）に対する祈禱への返礼や、和泉の久米田寺（同岸和田市）に対して同寺境内・寺領での軍勢の狼藉を禁止する護良親王の命令を伝える文書を発給している。右の軍事行動を円滑に実現し得たのも、再挙兵からわずかひと月足らずの間に正成が南河内や和泉南部一帯に影響力を及ぼしていたことが背景にあり、それは挙兵以前から正成、ひいては楠木一族が構築してきた地域社会との関係に根ざしたものであったといえよう。

幕府は、和泉の堺まで軍勢を進めた正成に対して、それ以上の北進を食い止めるべく、六波羅の軍勢を摂津の四天王寺（大阪市天王寺区）に派遣して城郭を構えさせた。正月十九日、

正成は五百騎ほどの軍勢で四天王寺へ攻め寄せ、六波羅軍を淀川（現在の大川）の最下流部の渡辺（大阪市北区・中央区）まで追い落とすという大勝利を収めた。

『太平記』にはこの後、四天王寺に下ってきた「坂東一の弓矢取り」宇都宮公綱とのにらみ合いや、四天王寺で聖徳太子が書き残したという「未来記」（予言書）を正成が披見したことが描かれており、正成の特異な立場が強調されている。

千早城での籠城戦

同月二十二日に千早・赤坂へと帰還した正成は、居館から南東約六キロの山間部にある千早城へと入った。千早城は金剛山系の標高約六七四メートルの稜線上に位置し、深い谷に囲まれた要害である。正成は千早城だけでなく、金剛山系の所々に城を構築し、それぞれに味方を配置した。大手本城の赤坂城に籠もった平野将監（しょうげん）入道は、鎌倉末期の京都で在京活動を行っていた摂津の平野（大阪市平野区）を本拠とする武士である。詳細は後に述べるが、彼は反幕府勢力と関係を有していたようであり、正成とも在京活動を通して結び付いたと推測される。ともあれ、金剛山系一帯に展開した正成らの反乱軍を鎮圧するため、幕府は再び軍勢を動員した。

幕府軍は、護良親王の吉野、正成の籠もる千早城、そして正成方の摂津の武士平野将監入

道が籠もる赤坂城へそれぞれ軍勢を進めた。北条一門の阿曾治時（あそはるとき）を大将とする軍勢は、二月二十二日に千早城に攻め寄せたものの正成に敗退した。二十七日には再び千早城一帯に総攻撃がかけられ、平野将監入道が守る赤坂城など諸城が落とされた。平野将監入道は他の将兵とともに幕府に投降したが、その後の運命はわからない。『太平記』が描くように、投降後、六波羅へ送られたのち、見せしめとして殺害されてしまった可能性もある（『太平記』六－9）。

閏二月に入ると吉野も陥落し、護良親王は紀伊へと落ち延びた。残る千早城には吉野や金剛山の諸城を攻略した幕府の軍勢が結集し、激しい戦闘が続けられることとなった。しかし、千早城が落とされることはなかった。正成は、またしても奇策を駆使した戦術で幕府軍をひたすら翻弄したのである。

正成の抵抗

この頃、正成が幕府の関係者であるということは京都で知れ渡っており、本来なら幕府の命令に服するはずの正成に叛（そむ）かれたばかりか、幕府がなかなか彼を討てずにいることを嘲る者も出はじめた。前記した「楠の木の根ハ…」の歌はそんな雰囲気の中で詠まれたのである。また、この間、正成と対峙したのは御家人たちだけではなかった。千早城での攻防がはじまった二月二十日、朝廷では「楠木城合戦」平定のための様々な密教修法が行われており、閏

二月十五日には鎌倉の北条高時の屋敷でも護良親王と正成を対象とした冥道供という修法が行われている（『門葉記』）。とりわけ、鎌倉ではそれまでも大小様々な修法が実施されたものの全く効果がないため、幕府の滅亡もいよいよかと危ぶまれていた。

そうした中、閏二月二十四日、後醍醐天皇が配流先の隠岐から脱出し、伯耆の武士名和長年の協力のもと、船上山（鳥取県琴浦町）に立て籠もって挙兵した。天皇は倒幕の綸旨（天皇の命令文書）を各地に発し、反幕府の気運を高めた。

一方、河内では幕府軍による千早城の包囲が続いていたが、将兵たちの士気は低下し、数度の攻防でも正成に連敗する状況であった。四月には包囲網に参加する幕府軍の将兵たちのもとに、吉野から逃れた護良親王の倒幕の令旨（親王などの命令文書）が届けられており、幕府軍から離反する者もあらわれはじめた。

六波羅探題の滅亡

その一人が、この後、鎌倉幕府を攻め滅ぼす上野国の御家人新田義貞である。義貞は親王の令旨を受け取ると、仮病を装って陣を引き払い、本国の上野へと帰っていった。ちょうど時を同じくして、畿内にはもう一人、幕府を見限る関東の武士がいた。のちの室町幕府初代将軍足利尊氏である（当時は高氏を名乗っていたが、尊氏で統一する）。尊氏は伯耆の後醍醐天

皇を捕らえるため京都に派遣されていたが、京都を出立した後、丹波の篠村八幡宮の地（京都府亀岡市）で軍勢を引き返し、五月七日に六波羅探題を攻め滅ぼした。幕府の出先機関として京都に設置された六波羅の滅亡は、承久の乱から一〇〇年以上続いた畿内一帯への幕府の支配が消滅したことを意味する。

六波羅滅亡の報せは千早城にも届けられ、立場を失った幕府軍は包囲網を解き、南都（奈良）へと落ち延びていった。ここにおよそ五ヶ月にわたって続いた正成の籠城戦は、事実上、正成の勝利に終わった。

鎌倉幕府の滅亡

五月二十一日、関東で兵を挙げた新田義貞が鎌倉を攻めると、北条高時以下、北条一門ら千人余りが自害に追い込まれて、鎌倉幕府の歴史に幕が閉じられた。

こうして元弘元年八月の後醍醐天皇の笠置山籠城から始まった正成の戦いは、終わりを迎えた。この後、正成は後醍醐天皇に仕え、新たな人生を歩むこととなる。

四、正成と建武の新政

建武の新政

伯耆から帰京した後醍醐天皇は、幕府を廃止し自らを頂点とした天皇親政の政治体制を構築した。いわゆる建武の新政（建武政権）である。天皇は倒幕戦争で功績のあった者たちを多く取り立て、彼らに破格の恩賞を与えた。それらには、六波羅を落とした足利尊氏や鎌倉を滅ぼした新田義貞は当然ながら、天皇の挙兵当初から天皇に従い倒幕戦争を続けた正成、隠岐脱出後の天皇を支えた名和長年、護良親王の令旨に応じて挙兵し、尊氏の六波羅攻略に協力した播磨の赤松円心（則村）らも含まれる。なお、正成とともに天皇に重用された名和長年・結城親光（ゆうきちかみつ）、公家の千種忠顕（ちぐさただあき）ら四名は、のちに三木一草（さんぼくいっそう）と呼ばれることになる。

正成は、後醍醐天皇が政権を運営する上で新設した雑訴決断所（ざっそ）（所領問題の訴訟を扱う機関）・記録所（朝廷の重要案件を裁決するための機関）・窪所・恩賞方（所領・諸職を褒美として与えるための審理・事務を担う機関）・武者所（京都の警固を主務とした機関）の五つの役所のうち、窪所以外の職員に任じられていた。また、畿内を中心に関東・東北や四国の所領も与えられていた。

正成の待遇

特筆すべきは、正成が従五位下の官位を与えられ、河内・摂津二ヶ国の国司・守護に任じられたことである。後醍醐天皇は古代以来の地方行政官の国司と、鎌倉幕府が諸国に設置した守護を併置したが、正成は河内・摂津とも両方を兼ねていた。そもそも正成は、貴族社会の身分秩序において国司に就任できる身分ではなかった。正成のように、幕府滅亡以前は兵衛尉・左衛門尉という六位相当の官職を帯し、五位まで到達できる身分を「侍」といい、それは尊氏のように五位から四位に昇進でき国司にもなれる「諸大夫」より下位に位置していた。尊氏が武蔵・常陸・下総の三ヶ国を与えられていることをふまえれば、身分違いの正成が二ヶ国も与えられたことはいかに破格の待遇だったかは明白であろう。

こうした厚遇は正成に限ったことではなく、名和長年や赤松円心ら後醍醐天皇に取り立てられた武士たちも同様であった。後醍醐天皇により、身分の低い武士たちが本来獲得できるはずのない官職やポストを得ている状況は、従来の秩序を破壊するものであり、天皇に対する非難・不満が募ることとなった。『梅松論』は、正成・長年・円心らが天皇の恩を笠に着て傍若無人な振る舞いをしていたと記すが（『同』上）、実際に彼らがそうした態度であったか否かは別にしても、天皇と結び付いて急速に台頭する新興の勢力は、天皇と同じく非難の対象となっていたわけである。後醍醐天皇への反発は中央・地方を問わず、政権発足当初か

らくすぶっており、やがてそれは政権を崩壊させる大きなうねりとなる。

五、建武政権の崩壊

建武政権への反発

建武の新政開始以降、列島各地では政権に対する反乱が頻発した。その半数以上は北条氏与党が関与したものであり、正成もそれらの鎮圧に駆り出されていた。例えば、建武元年（一三三四）十月には紀伊国の飯盛城（和歌山県紀の川市）で蜂起した故北条高時一族らの反乱に対処している。

ちょうどその頃、京都では幕府滅亡以降、足利尊氏との対立を深めていた護良親王が謀反の疑いで捕縛され、翌月に関東へ護送されるという事件が起こっていた。倒幕戦争における親王と正成との関係からすれば、正成の紀伊への派遣は親王に協力しかねない正成を牽制するための措置ともみえなくはない。だが正成は河内国司・守護という立場にあったことで、反乱が起こった国に隣接する国司・守護がその鎮圧に向かうという古来から続く慣習に則って出兵したに過ぎない。むしろ、建武政権期以降、親王と正成との間には距離があったとみられ、両者が共闘する可能性は低かっただろう。

この事件後も、建武二年四月に京都で高時一族の高安を正成が討伐したように、北条氏残党・与党による反乱が止むことはなかった。そうした中、建武政権を揺るがす事件が起こった。

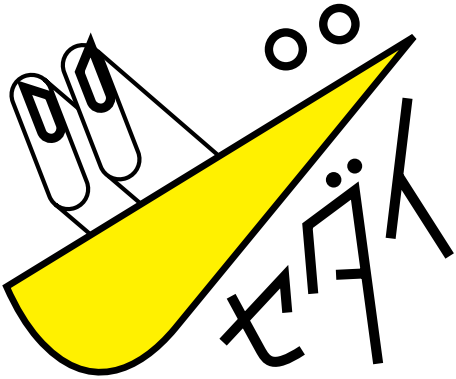
西園寺公宗の謀反

建武二年六月二十二日、鎌倉時代に関東申次という、幕府と朝廷との連絡を橋渡しする役割を世襲した、西園寺家の西園寺公宗が、後醍醐天皇の暗殺を企てた罪で武者所の正成と高師直に逮捕されるという事件が起こった（『匡遠記』）。

鎌倉幕府の滅亡により幕府と朝廷を繋ぐという重要な役割を失った公宗は、故高時の弟の泰家を匿っており、高時の遺児時行らとともに列島各地で兵を挙げ、建武政権を転覆して幕府を再興し、自らの地位の復権を目指したのである。

中先代の乱

天皇の暗殺と列島各地での反乱は失敗に終わったものの、同年七月に高時の遺児時行が信濃で挙兵し、鎌倉を占領した（中先代の乱）。鎌倉には建武政権が関東一帯の統治機関として設置した鎌倉将軍府があり、後醍醐天皇の皇子成良親王と足利尊氏の弟の直義が詰めていたが、時行に敗れて鎌倉から逃れていた。そんな弟の窮状をみた尊氏は、天皇に時行の討伐許



何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント　著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研　若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み　既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!